わらべうたあそび・江戸囃子を通して培うもの

―日本音楽の持つ教育的意味を子どもの変容から探る―

Learning cultivated through children's singing games and *Edo-Bayashi* —Investigating the educational meaning of traditional Japanese music through children's change—

お茶の水女子大学附属小学校

猶　原　和　子

Ⅰ　主題設定の理由
　1　学校教育で日本音楽を扱う必要性
　2　身体で味わう日本音楽
　3　日本音楽に関わる14年間の実践
Ⅱ　研究の目的
Ⅲ　研究の方向
　1　「学び」の捉え方
　2　「音楽」の捉えかた
　3　授業を構成するにあたって
Ⅳ　実践と考察１　「わらべうたあそび」
　1　低学年で身体と心を育む
　2　わらべうたあそびの魅力と教育的意味
　3　あそびのなかでの関わりあい
　4　子どもの変容
Ⅴ　実践と考察２　「江戸囃子」
　1　江戸囃子の魅力と教育的意味
　2　６年間の変容
　　(1)　お囃子の導入と「祭りだ　ワッショイ」〈２年〉
　　(2)　本物との出会い～江戸里神楽と獅子舞の鑑賞で飛躍した表現～〈２～３年〉
　　(3)　ミュージカルの中での江戸囃子〈４年〉
　　(4)　ミニコンサートで表現の場を広げる〈４～６年〉
　　(5)　文化をつなぐ〈６年～卒業後〉
Ⅵ　まとめ
　1　学習材としての日本音楽の有効性
　2　授業に対する子どもの評価
　3　学びを育む表現の場の工夫
　4　教師の役割
Ⅶ　おわりに

Ⅰ　主題設定の理由

1　学校教育で日本音楽を扱う必要性

学習指導要領の改訂に伴い，音楽教育は授業時間の削減も含め，大きな変化を求められている。中学では和楽器に触れることが必修となったが，日本音楽の扱いについては，まだまだ戸惑う教師が多い。総合的な学習とも関連し，今後の音楽教育のありかたはどうあるべきか，音楽を通して子どもに何を育もうとしているのかが，私たち教師に改めて問われている。

そもそも，なぜ「日本音楽」と特別に銘打って考えなければならないのか。それは，私たち音楽教師が，明治以降の音文化政策を背景に抱えているからである。近代の学校音楽教育は，19世紀のヨーロッパ音楽に価値を置き，いわゆる「クラシック音楽」こそが正しい音楽であるかのように，子どもを指導してきた。その結果，音楽教師のほとんどはピアノやヴァイオリンを習い，西洋的発声法を大学まで学んでいる。このような音楽経験のなかでは，日本音楽は「異質な」文化であり，近づきにくい「壁」を感じるのである。

現在は，世界の様々な地域が結ばれ，多様な価値観を持った異なる民族の人々が地球上を行き交っている。その人を，或いはその人の生きてきた国の文化を知るために，外国の人から日本の伝統的な音楽について尋ねられた経験は，誰しもあるのではないだろうか。学校教育の中で，日本のことばや伝統的な儀式・風習とつながった日本音楽を扱うということは，そのままでは気づかないで廃れていくかもしれない文化を存続させていくという意味で大きい。今を生きる子どもが伝統を継承している日本音楽に触れること・身体を通して経験することは，多様な音楽や文化に心を開き，受けとめ，自分らしく社会とつながっていくことのできる表現者として育つ一歩だと考える。

2　身体で味わう日本音楽

私は，島根県の西端，津和野町の神社の家に生まれ，幼い頃より石見神楽や祭り囃子，鷺舞（国の無形文化財指定）に慣れ親しんできた。動きや踊りと一体になった音楽を聞くと自然に踊りたくなるし，そこで舞う大人の人々の呼吸を感じるのが好きであった。また，舞台裏で話をしている舞手や演奏者の会話を聞くこと，その場にいること自体がとても楽しかった。

このような環境に育ったこともあってか，20年前，御嶽山横笛セミナー* で，福原百之助先生の篠笛と若山社中の江戸里神楽に触れた時，音色に癒されると同時に心にずしんとくるものを感じた。また，このセミナーは教師が対象ではないので，純粋に笛やお囃子が好きで，上手になりたいと思う人々が集まっていた。真摯な態度で，実に楽しそうに演奏する姿から，私は「学ぶ」ことを教わった気がした。実際に締太鼓を打ち，篠笛と一緒になって，互いの息使いを感じながらテンポをあげていくのは，緊張感を持ちつつも快感であった。さらに，数年後，同じセミナーの子ども塾に参加した息子（7歳，5歳）が，わずか2日間で三味線で「かごめかごめ」を弾き，篠笛をつくり，獅子をつくって楽しそうに踊っている姿を見たときに「これが音楽教育だ！」と実感した。ここで生まれる表現行動は子どもにとって「あそび」である。身体まるごとで大人の表現を周辺から見て，感じ，真似る。真似ながら独自の動きを思いつき，自由に表現している。まさに「あそび」であり，「学び」であると思った。

以来，授業の中で，あの快感や楽しみを子どもと共有したいと考え，実践を重ねてきた。

※御嶽山横笛セミナー　主催　横笛友の会（邦声堂）運営

3　日本音楽に関わる14年間の実践

本校での14年間で，私が試みた日本音楽に関連した学習活動は，資料①の通りである。右の欄に学習の発表の場や鑑賞，関連行事などを載せた。

カリキュラムを構成するなかで基盤にしたのは，低学年での「わらべうたあそび」，地域に密着した「江戸囃子」である。どちらも身体と深く結びついた音楽表現である。今回の研究では，この二つの学習活動を取り上げ，活動の意味と活動を通して培われる子どもの「学び」を考える。

資料①　　過去14年間に行った日本音楽の実践

年度	学習活動名（対象学年）	表現の場　鑑賞　関連行事
90	わらべうたあそび（1）　八丈太鼓（3） 北原白秋「おまつり」群読とおはやし（3）	全校音楽会
91	わらべうたあそび（1，2）　替え歌（1・4） 太鼓で遊ぼう（2）江戸囃子と両面踊り（4） 音楽物語をつくる　創作「みらい太鼓」大太鼓（4）	☆「江戸囃子に触れる」（4，5年）若山社中 全校音楽会 研究発表会での児童発表　（4）
92	わらべうたあそび（2）替え歌（2）江戸ばやし（2） 「秋の収穫を祝う太鼓」（3）詩と音楽（6）	全校音楽会
93	わらべうたあそび（1）かえうた（1）	全校音楽会
94	わらべうたあそび（1）太鼓でお話（1） 八丈太鼓（4）ぶちあわせ太鼓（4） 詩と音楽（5）能管　小鼓の唱歌（5）	☆太鼓博物館・太鼓製作見学（4年課題別） ☆国立能楽堂「親子で楽しむ能・狂言」（5／6／保護者） 全校音楽会
95	わらべうたあそび（2） 江戸ばやし（2　帰国）　まつりだワッショイ（2） ししづくりと虎まい（2）	全校音楽会 ☆アジアの踊りと音楽（1～3年） ☆「江戸里神楽とお囃子を親子で楽しむ」 （全学年　保護者希望者）
96	わらべうたあそび（1・3） 獅子舞の音楽をつくろう（3）	全校音楽会
97	わらべうたあそび（1）替え歌（1・4） 音楽物語「われこそはネコ」（4） 劇中の江戸囃子と獅子舞　ぶちあわせ太鼓 みこし　まとい　獅子つくり　（4）	ミニコンサート 全校音楽会
98	自由な発表の中での江戸囃子（5）	ミニコンサート　全校音楽会 ☆ 太鼓博物館見学（4年課題別） ※この年から1～3年音楽なし
99	同好会による江戸囃子（6） 「屋台」全曲発表	☆ミニコンサート　音楽会 江戸東京博物館前演奏（6）
00	わらべうたあそび（1）　替え歌（1） 江戸ばやしであそぼう（3）	全校音楽会 ※低学年週1時間　音楽的活動の時間復活
01	わらべうたあそび（2）替え歌（2） 総合「海」と合わせた音楽物語（2） お囃子　太鼓　楽器　みこし　踊りづくり 音楽物語「我こそはネコ01」お囃子　獅子舞　大太鼓	全校音楽会 ミニコンサート ☆6年卒業公演歌舞伎「毛抜き」の鑑賞（全学年）
02	わらべうたあそび（1）　替え歌（1） ことばあそび「おいしいおいしい」（1） 箏に触れる（3）　詩をうたう（3） 江戸囃子とおかめひょっとこ踊り（3）	☆狂言鑑賞 全校音楽会　ミニコンサート ☆箏の演奏鑑賞と実技教室（3） 東京芸大から20面の箏を借りて
03	わらべうたあそび　替え歌（1）　箏を楽しむ（5） 自由な発表での箏演奏（4／5） お囃子（1）大太鼓（帰国）	全校音楽会 ミニコンサート

※　本校は1学年3学級，4年以上は帰国児童学級も加わり4学級である。また，教科担任制をとっており，私は3学年の音楽を担当している。

※　太字は94年から99年まで，私が6年間継続して担当した学年の実践である。今回「江戸囃子」を主として報告する。「わらべうたあそび」は低学年を担当すると毎回実践している活動単元である。

※　全校音楽会は毎年行っている。98年から3年間は音楽という教科がなかったので形を変えている。99年は音楽会に1～3年生が参加していない。

II　研究の目的

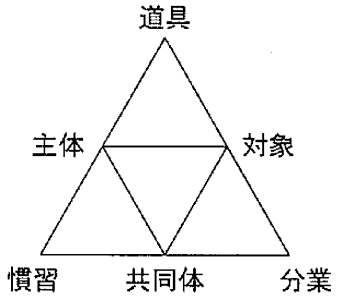
本研究は，「わらべうたあそび」と「江戸囃子」の実践を振り返り，個々の音楽表現はものや人と関わって，どのように変容したのか，他の音楽表現にどのような影響を及ぼしたのかを考察する。また，その子なりの学びの履歴を辿りながら，学校教育の中で，日本音楽を扱うことの意味を，「学ぶという営み」に焦点をあて，考察する。

III　研究の方向

1　「学び」の捉え方

佐伯胖は，学びを「認知とか情動とかに分離できない，その人間の全体性（私は，私であり，私以外のなにものでもない）に関わる営みであり，『自分探しの旅』」と捉え，「モノと関わり，一人ひとりが自分の文脈で文化的実践に参加すること」と述べている。子どもがそれぞれに『私の物語』を創りながら，それが全体として『共同体の物語』となるという考えは，子どもの行動をどう受けとめるかということに示唆を与えてくれた。さらに，佐藤学は学びを「対象世界との出会いと対話（認知的実践＝世界づくり），他者との出会いと対話（社会的実践＝仲間づくり），自己との出会いと対話（倫理的実践＝自分探し）という三つの対話的実践による『意味と関わりの編み直し』（佐藤　1999）」と定義づけ，「活動的で協同的で反省的な学びとして遂行される（佐藤　2003）」と述べている。その上で，〈差異〉を尊重しあい，響き合う，シンフォニーのような学びの共同体づくりを提唱している。

佐伯・佐藤二人に影響を及ぼしたヴィゴツキーの考え方を拡大し，モノや人，対象と個人そして共同との関わり合いを表したものが『エンゲストロームの三角形』である。道具（楽器や演奏行為）と作品やその時々の共同体との関わり，そこでの自分の役割，また作品や行為そのものの背景にある儀式的或いは社会的な意味合いなど，関わりの中で学びを捉えていくことが大切である。この図を具体的に考えて，音楽の授業全体を新たな視点で見直そうと考えた。



資料②　エンゲストロームの三角形

2　音楽の捉えかた

「音楽に序列はない」「ナニモノモ　孤立シテイルト　ミナサナイコト」これは徳丸吉彦の言葉であり，私の音楽教育観の源である。音楽は単独に存在するのでなく，社会の文脈に位置付いており，時代や地域，社会背景とそこに関わるすべての人々との関係の中で，常に変化し続けているものである。一つの作品には作曲者の考え，その時代に使われた楽器や音響設備，演奏者の技能，当時の価値観などが存在する。楽譜や録音から再現するということは，それらが今の演奏者や今の聴き手や使用楽器などによって転位し，異なる文脈の中で営まれ，意味を持つということである。

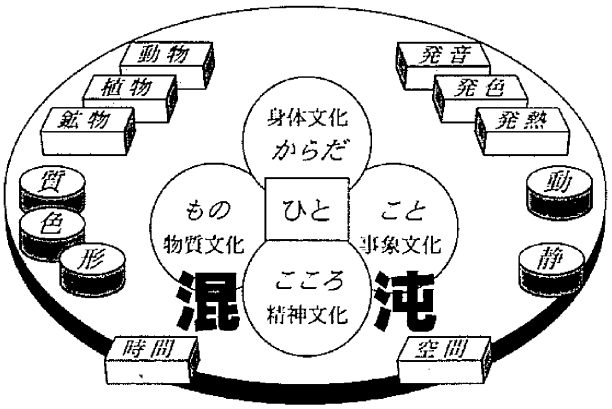
山口修は転位（transposition），脈絡変換（transcontextualisation），変形（transformation）という三つのトランス理論を掲げている。

ある作品について「これが正統的な音楽解釈」と決めつける風潮はまだまだあるし，伝統音楽においては「固定化された文化の保存」のように扱われることが多い。しかし，古い伝統を持ち，大切なことを継承しつつ，様々な関わりの中で，伝統音楽もまた常に変容しているのだという自覚を教師が持つことが重要である。

文化全体を混沌とした上で，山口はそこに構造として四つの属性がはたらいていると考えた。子どもの表現行動をこの４つの属性と関わらせて考えて見ることに意味があるように思える。

繰り返しになるが，学びは状況の中に埋め込まれており，音楽的な営みも様々な関わりあいの中で紡

がれている。このことを頭に置き，子どもの背景にある文化的側面を意識し，その子なりの文脈で表現することができるように，授業をデザインすることを大切にしたいと考えた。



資料③　混沌としての文化の４つの属性（山口　1998）

3　授業を構成するにあたって

実践を進めていくにあたり，次の４つを大切にした。

① 子どもの内側に存在する感覚，すなわちことばや身体の動き，踊りなどの表現媒体を伴うまるごとの音楽的な感覚を大切にする。

② 江戸囃子などの様式を理解させるとともに，そこから発展したクリエイティブな活動を組織化する。

③ 学習を音楽室内にとどめず，実際に本物のお囃子に触れる機会を設けたり，行事などと組み合わせて表現鑑賞の場を広げ，子どもの表現を高める環境を整える。

④ 一人ひとりの子どもが，その子らしい学びの道筋を持てるように，活動の幅を広げ，多様な関わり方を認めていく。個人が興味関心に基づきながら，どのように他者と関わり，集団として育っていくかをていねいに見守る。

Ⅳ　実践と考察１　「わらべうたあそび」

1　低学年で身体と心を育む

一人ひとりが豊かな表現者になるためには，幼児期から，心揺れ動く体験を積み重ねることが大切である。友達や新しく出会った人やモノと向き合える心と身体を育みたい。高学年では遅い。

入学までの幼児期は生活すべてが遊びであり，その中にたくさんの学びの芽を持つ。だがよくみると，好きなことを気のあう子とだけ遊び，嫌になればすぐやめるといった経験しか積んでいない子が目につく。

異年齢の遊びが日常的に成立する地域では，年上の子の仕草，動きを見よう見まねで模倣しながら，自然に決まりや社会性，人との関わり方を学ぶことができる。しかし，本校に入学した子をみると，幼児期に経験して欲しい遊びや人との関わりにとまどいを見せる子が年々増えている。きちんと向き合う姿勢を持っていないことも気になる。私は以前にも増して，低学年の心と身体と結びついた授業を重要に考えるようになった。授業の核として位置づけているのが「わらべうたあそび」である。

2　わらべうたあそびの魅力と教育的意味

わらべうたは，従来子ども世界で育まれてきた文化であるが，意識的に働きかけないと消える要素も含んでいる。わらべうたの魅力は，日本語の自然な音感と動きが一体となり，そこに形式と時間的な構成を持つ創造的なドラマであるところだ。教師が一度その世界に案内すれば，子どもは旋律や遊びを自然に転位しながら，自分たちのあそびとして自由に楽しむことができる。

何度もあそびを繰り返すなかで育つことは多い。ルールを覚えることは社会性に通じ，となえ歌は語呂合わせや，ことばあそびに広がる。リズムを意識させることは集中力や反射能力を高め，メロディーや音色に敏感な耳を養うこともできる。

しかし，そのためにあそびをするのでは意味がない。教師ともども，あそびの世界でどれだけ豊かで楽しい体験ができるか，が大切である。わらべうたの中には分化されていない子どもの文化が確かにあり，絶えず変化している。今生きている子どもの生活に根ざし，そこから生まれてきた表現を大事にすることを心がけたい。

ここであえて「わらべうたあそび」としているのは，もともと各地域で行われていたわらべうたを，コダーイの考え方を生かした教育的なあそびとして，一部を意識的に手を加えたからである。なお，わらべうたに関しては，元和光小学校教諭，故野倉盛夫先生と一緒に勤務していた5年間に，先生から直接教えていただいた曲をもとにしている。

94/95年度の子どもが2年間で遊んだ曲を資料④に載せた。

毎時間15分程度で，新しいあそびは全員の場で交代で行う。わかってきたら屋上に移り，グループ毎にできるだけたくさん遊ぶ時間を設けた。人気が高かったのは「ちょっぱー」や「どーやくびんびん」など。現在は曲を精選し25曲程度で行っている。

リズムカードやハンドサインであそびに含まれる構成音やリズムを取り入れ，意識化をはかった。

また，わらべうたにオスティナートを加えたり，カノンにして歌うような活動も取り入れた。

子どもにとっては，音楽室での活動すべてが遊びに感じられるようで，ハンドサインやリズムカードをあそびうたのようにリクエストする場合もあった。

資料④　2年間であそんだ日本のわらべうた

《94/95年度》

あそびの種類	あそびの曲名（33曲）
オニきめ	いちじくにんじん　いっちくたっちく いっちょこにぐるま　おーふぐこふぐ
一人あそび 手あそび	くまさんくまさん　たこたこあがれ ちゃちゃつぼ　十五夜さんのもちつき
門くぐり	どーどーめぐり　どんどんばしわたれ どーやくびんびん　びっきどの いちわのからすが
人あてあそび	もぐらどんの　ぶーぶーぶー さらわたし
輪を動かしたり人数が増減するあそび	おらうちの　くまさんくまさん　からすかずのこ　お茶をのみに　なかなかホイなべかま　たまりや　ひとなげふたなげつーながれ　赤鬼三匹　いもむしごろごろ　一銭かいましょか　おせよおせよさるのこしかけ
そのほか	さよなら三角またきて四角(となえうた) ねんねんねやまの(歌い聴かせ) げっくりがっくり(歌い聴かせ)

3　あそびのなかでの関わりあい（1年1学期）

入学してまもなく，「チョッパー」という足じゃんけんを取り入れた。最初は教師と，少し慣れたら，近くの2人組やグループ対抗戦であそぶ。飛び跳ねるあそびには身体のぎこちなさがよく表れる。走るのが得意な幸夫は，最初はチョッパーが苦手だった。跳ねるという行為はマンションが多いせいなのか，出来ない子が多い。足じゃんけんに自信満々の子は列の最初に並び，ちょっと不安な子は後ろで他の子の動きを見ながら真似して覚えていく。ひざの使い方が柔らかくない幸夫や多佳子が順番になると，まわりの歌声のテンポが自然に変わる。彼らの足に合わせてゆっくりと歌うのである。遊び手に周りの子が息を合わせて歌っている。関わりあいの中で生まれるテンポである。また，「チョキだせ」「正という字が二つなれば勝ちだ」と声をかけてチームを応援する姿もでてくる。

倒立や側転が得意な創太は，身を友達に委ねることができない。互いに身体を揺らしあうあそびをする時には，石の様に固くなり突っ張る。身体を委ねることができるようになるためには，心と身体両面からのほぐしが必要である。勇樹の場合は，友達と向き合うことにためらいがある。貨物列車や「チョッパーを3回違うお友達としよう」という教師の言葉かけを聞くと，決まってトイレに走る。摩耶も「ちょっとおなかが痛い」が始まる。普段気の強い二人だが，どちらも外部から入学してきた。※

彼らにとって，新しい人間関係の中で，少数派として大勢に入っていくのは，なかなかつらいことに違いない。声をかけられたり，次々と見知らぬ相手からじゃんけんを申し込まれるうちに，だんだんと笑顔が戻ってくる。自分の存在が認められていると実感すると，安心して再びあそびの世界に参加できるようだ。教師としては，様々な方法で，友達と関わる場を設定し，経験を積み重ねさせることが大切な仕事だと考えている。

※本校は約半数が附属幼稚園から進学し，後の半数は都内23区から入学する。

4　子どもの変容

(1)　葛藤して育つ

あそびの中では様々な姿が浮かび上がる。1年の6月半ばになると，ほとんどの子はクラスの子の名前を覚える。グループを変えながら子ども達は友達の声に耳を澄ます。鬼の後ろにいる子の声を聴いて誰かを当てる人あてあそびの「もぐらどん」。鬼でわからない時は薄目でしゃがみ，後ろの子の足もとを盗み見ようとする子がいる。自分がオニになりたくて輪をくずす子もいる。当然「ずるいぞ」という声がでる。「まったく，いつも男の子は輪を乱すんだから」と怒って指図している美加に向かって，「男子も悪いけど，いつも文句ばっかり言って，遊びをできなくしちゃうのは美加ちゃんだと思う。一緒にやりたくなくなっちゃう。」と思わぬところから攻撃もくる。美加にとっては正義を振りかざしているつもりだから，納得できない。先生も相手してくれないとなると，仲間内で話し合うしかない。楽しそうに遊んでいる他のグループをみると，なおさらである。ごちゃごちゃしながら何とか折り合いをつけようとする。一年生は仲直りも早い。

(2)　呼吸が揃う

様々な葛藤場面を経て，人とつながる楽しさや手をつないで動くあたたかさを感じ始めると，心地よい流れが生まれ，いい声も響く。動きがスムーズになると呼吸もそろってくる。

政夫は抑揚が少なく低いしゃべり声で，どこかおどおどしていた。そんな彼が変わったのは，「どんどんばしわたれ」のあそびの時。二人組で門をくぐっては，また門になるという繰り返しなのだが，仲間のだれかが，あそびの途中でかけた「はい！」という合いの手がとても気に入って，すぐに真似を始めた。やがてかけ声に合わせて門をおろすという動きも加わり，調子よくみんなの声と足音が響き始めた。政夫は合いの手だけでなく，遊びながら自然に歌い始め，屋上の端から端まで門が移動する頃には，いい表情で，みんなと同じ高さの声で歌っていた。

気が強くみんなに恐れられていた結子は，あそびでトラブルをよく起こし，気に入らないとつまらなそうにふくれていた。クラス替えした3年の最初，「どんどんばしわたれ」の新しい遊び方を考えて，みんなに発表した。男子がまずおもしろそうだと飛びつき，やがて煙たがっていた女の子も一緒に遊び始めた。あそびの経験から生まれた発想が，仲間に受け入れられる一つのきっかけとなったのである。

一つひとつはささいな出来事に思える。しかし，あそびの世界に身を置き，その子なりにあそびを楽しんだことが，後の表現行動に大きく影響するのである。

(3)　楽しみ方が広がる

様々な体験は，また，新しいあそびも生み出す。「くまさんくまさん，かたあし上げて」はあるクラスでは「くまさん　くまさん，かかしになあれ」とことばが代わり，動きも伴って変化した。

ぶーぶーぶー		コン　コン　コン	にゃー　にゃー　にゃー
たしかかにきこえる	→	たしかかにきこえる	たしかにきこえる
ぶたのこえ		きつねのこえ	ねこのこえ

いちじく	ニンジン	さんしょに	しいたけ	ゴボウで	ほい
いぬに	にわとり	サイに	シマウマ	ゴリラで	ほい
イチゴに	にんにく	さとうに	しおじゃけ	ごはんで	ほい

さよなら△またきて□，□は豆腐，と続き，「ひかるはおやじのはげあたま」で終わるとなえうたも，毎回新しい替え歌が登場する。きたないことばや匂いの漂うような替え歌もでてくる。しかし，この世界だから許されるものもある。子ども時代に通り過ぎたい一つの文化である。

さよなら△またきて□，　□はおに，　オニはこわい，　こわいはおかあさん
おかあさんはあったかい　あったかいは毛布　……

こわいから，あったかいへ。顔を見合わせてうなずき，共感している姿をみると，1年ならではの発想だなあと感じる。思いついたことばを唱える子も，それを聴いて，喜んだりつまらなさそうにする子も，身体であそびを共有している。一人の子のアイディアに触発され，次々と新しいあそびうたが生まれることもある。口頭伝承から学ぶのは，日本音楽の基本的な姿勢である。「今，ここで」の音の関わりあいを肌で感じ，真似て楽しむことが，低学年ならではこそ，いとも簡単にできるのだと実感している。

V　実践と考察2　江戸囃子

1　江戸囃子の魅力と教育的意味

江戸囃子を取り入れたのは，主題設定の理由にも挙げたように，まず第一に，私自身がすっかり夢中になったからである。実践を継続して感じる江戸囃子の魅力と教育的意味は，以下の通りである。

①東京に住む子どもがお祭りなどでよく耳にしている音楽で，親しみやすいこと。地域的に社会（本物）の文化とつながっていく機会も得やすい。
②締め太鼓の響きが心地よいこと。他の楽器にくらべ，低学年の子にとって，自分の体に跳ね返る音や振動を，楽器に向かう動きと一体化して感じ取ることができる。
③合わせる楽しさを味わえること。祭り囃子は締め太鼓2，桶銅太鼓または大太鼓1，篠笛1，当たり鉦1が基本である。自分の演奏を大事にしながら，友達と合わせてアンサンブルの楽しさを味わうことができる。
④それぞれの楽器にふさわしい唱歌（しょうが）があること。5線譜やリズム譜を絶対視するのでなく，音の高低やリズム，音色も表す唱歌は，すばらしい表現手段であり，音楽である。
⑤自分らしい，自由な演奏をつくりだす部分を持っていること。江戸囃子は伝統的な型にはまっていると思われがちだが，「投げ合い」のように演奏者がその場の息で自由に演奏する部分がかなりある。基本を覚えたら，その子なりの打ち方や吹き方を工夫していく，広がりのある題材である。
⑥ドラマ性を強く持っていること。もともとが単独の演奏でなく，神輿にともなうパフォーマンス性のある音楽であるし，獅子舞や両面踊りなどが加わると，よりクリエイティブなドラマとなる。体で音楽を受け止めるだけでなく，身体表現も合わせて行うことは，子どもの興味・関心を発展させ，より広い文化との出会いにつながる可能性がある。

2　6年間の変容

ここでは，94年から99年までの6年間，私が継続して担当した子どもの実践を報告する。

(1)　お囃子の導入と「祭りだ　ワッショイ」〈95年度2年〉

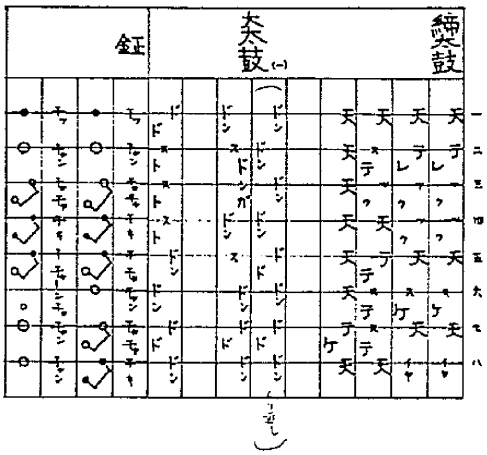
1年では大太鼓を用い，「太鼓でおはなし」を行った。自分が打った皮の振動に驚いたり，大きな音に耳をふさいだりと，おもちゃで遊んだ感覚だった。

2年の6月，お囃子が街でも聞こえ始める時期に，江戸囃子の基本の手に入った。まず私が篠笛を吹くと，「知ってる！」「おまつりだ！」と次々に声があがった。締め太鼓の唱歌（しょうが）を書き，私が唱歌をうたいながら演奏した。最初は「大太鼓より音が小さい」と迫力を求めていた子どもも，「不思議だ。本当にテンテレツクツクって聞こえる」と唱歌を楽しみ始めた。基本の手は資料⑤のとおりである。思うように太鼓は打てなくても，唱歌の声は次第にそろってくる。そこで私が篠笛を演奏をいれると大喜び。太鼓にメロディーが加わると祭り囃子がより身近になる。毎回10分程の時間だが，子どもは8台の太鼓をめがけて並び，自分の番になると正座して思い切り打ちこんでいた。バチに力が入ると音

がとまるので，「いいな」と思う音色の子をじっと見て真似る。

締太鼓の基本を覚えたところで，桶胴太鼓を加えた。響きが厚くなり，アンサンブルのおもしろさが増す。3つの中から好きな唱歌を選んで合わせて歌うだけでも，素敵な音空間が生まれる。

2年生では篠笛はなかなか鳴らない。けれどもリコーダーを経験していないので，タンギングの癖もない。「とーふー」と鳴れば大喜びである。瑠偉は地元でもお囃子を楽しんでいる。「頭がくらくらする」といいながら篠笛に挑戦した。



資料⑤　江戸囃子　手附

私は篠笛のことを小さいときから知っていました。品川区の無形文化財になっている「品川囃子」を父がやっているからです。私の父は「鼓」を打つほうです。自分もいつかやってみたいなと思っていました。

学校で篠笛を始めたのは2年生の時でした。早く吹けるようになりたいと思い，家に帰ってからも練習しました。始めはなかなか吹けずにどうやったらあのような音がでるのだろうと思い，吹く角度を変えながら吹いていました。ある日，いつものように角度を変えてやっていた時，初めて「ピー」という音がでました。お祭りの時に残っている音とは違う音でしたが，低くても鳴ったのがうれしく，何度も何度も吹いて家族にきいてもらいました。　……後略……

瑠偉の卒業文集より

ロケットに乗って子どもが宇宙にでかけると銀河食堂があり，ちょうど開店百周年をお祝いしていた。すいか星人などの宇宙人も現れてみんなで仲良くあそび，一緒に百周年を祝う。

二年秋の音楽会では「宇宙のおまつり」をイメージしたお話をつくった。

ロケットが好きな子は，宇宙船の絵を描いた。お祝いは虎舞の太鼓と江戸囃子の基本を締太鼓で打った。一人ひとりが獅子も作った。菓子箱を二つ組み合わせ，風呂敷をつけ，顔は紙コップやぼたんなどを用いて，表情をつけた。ねずみやきりん，ドラえもんなど虎ならぬ個性的な獅子がたくさんできあがり，お囃子に合わせ思いのままに動いて遊んだ。音楽会当日は，各クラスでアイディアを出し合った3台の大きな獅子が登場し，講堂の中を動き回った。後に江戸囃子の中心となる政志は，この時は太鼓にもあまり興味は示さず，銀河食堂のおじさん役で，さそりやアンドロメダのかき氷を作る役を楽しんでいた。

(2)　本物との出会い～江戸里神楽と獅子舞の鑑賞で飛躍した表現～〈95年度2年～96年度3年〉

3学期，保護者主催で「親子で江戸里神楽と獅子舞を楽しむ会」が行われた。自由参加ではあるが講堂がほぼ満席になるほど大勢の参加であった。「音楽会で初めてお囃子を聴きました。私も神楽を観たことがないのです。」という保護者も多かった。演目は「江戸囃子」「里神楽『悪者退治』」「寿獅子」。若山社中の方々が来てくださり，神楽の動き，手や振る舞い方の意味など説明していただいた。稲荷の神から弓矢をあずかった千箭が，悪鬼退治をするという神楽は，二匹の鬼の立ち回りやひょうきんなしぐさがおもしろくてわかりやすく，低学年も喜んで鑑賞した。

みんなで締太鼓の基本の手を唱歌した後に，「寿獅子」が始まった。

狂い～寝わざ～じゃれ（みかんを食べる）～眠り～狂い～両面もどき～狂い　という流れである。

獅子の仕草の説明を聴いたあとだったので，実際に獅子の耳が動いたり，眠っていく様子，ハッと気がつき動き回る様子を，子どもたちは，食い入るように見ていた。また，「天テレツクツク」「チーヒャ

イヒャイトロ」という音楽が聞こえて来ると，顔を見合わせたり手を動かす子が何人もいた。おかめ，ひょっとこの両面踊りも大喜びで，大人も子どもも充実した楽しい会となった。次の授業時間には，早速真似する子が続出した。獅子の動きは一変し，腰を落として回ったり，寝そべったり，飛び上がって大きく見せようとする動きがでてきた。「お囃子はすごく早い。あんな風にやってみたい」という声が多く，口と手がバラバラになりながらも，早口言葉のように唱歌を歌っていた。

鑑賞した中で，興味を持ったところは一人ひとり異なる。しかし，お囃子が唱歌とともに身体に入っていたので，一緒に演奏に参加したという思いを持ったようである。2学期とは違う顔ぶれが，太鼓に向かいだしたのは，プロのお囃子の文化的価値（本物の文化的実践）を五感で感じたからであろう。演奏技能はもちろん，お囃子に向かう演奏家の姿勢，語られることば，表情，仕草丸ごとが，子どもにとって大きな学びである。このような体験は，子ども達の技能も感覚も，飛躍的に伸ばすのだと，以後の表現をみながら感じている。

3年になってからは，グループに分かれ，「自分たちのオリジナル獅子舞，おはやしづくり」を試みた。本物を観たから浮かぶアイディアがあり，できばえはかっこよくないが，即興的に音をつくって応答したり，身体で楽しむという，江戸囃子の持つ自由な雰囲気をつかんで創っているのが感じられた。

(3) ミュージカルの中での江戸囃子〈97年度4年〉

4年生になると，音楽の授業形態を変え，「自分で計画し，好きな曲を好きな形で演奏する」というミュージックプランに基づく学習を進めた。(「学びの共同体」猶原　1996)歌や踊り，木琴に夢中になる子がいる中で，江戸囃子にこだわって演奏し続ける子もいた。

総合の時間と合わせて挑戦したミュージカル「われこそはネコ」は，台本をもとにしながら，自分たちで考えたネコを登場させ，ことばや音楽を考え，学年全体で創りあげた作品である。

（詳細は「都市型の総合的な学習」p144～P151 東洋館　2001）

フィナーレを飾る江戸囃子。ここで，お囃子を希望したのは，瑠偉や勇作である。二人とも2年の時から篠笛が鳴っていた。今回は「江戸囃子の基本の手」を自分たちだけで，つまり教師の笛の応援なく演奏すると張り切った。太鼓が大好きな雪菜と緊張しがちで肩に力が入りがちな保も加わり，毎朝練習を始めた。政志は穏やかな性格であったが，この時期，受験のための塾通いが始まりいらだっていた。彼は桶胴太鼓を希望し，締太鼓と息を合わせて思い切り打っていた。「天」という音色が響き始めると次第にテンポもあがる。「獅子になってしまった」と不満だった隆は，「おれは獅子」と最初からやる気の学人と一緒にお囃子に合わせて踊った。当日は獅子の動きに観客の反応が直接はね返った。このような経験は貴重である。観客の反応に支えられ，動きは練習の時以上に大きく見えた。「獅子をかっこよくできて大満足」の隆は，以後，初めての楽器に次々とチャレンジし意欲的な演奏を行った。獅子を表現できた満足感が，次への意欲につながったのだろう。

> 僕はヤクザ1の役をきぼうしましたが，落選してしまいました。(中略)　その後，僕は前Kくんがやっていた「獅子」をやることになってしまいました。獅子の役は，劇の最後にネコたちが仲直りして，お祭りをするときにやる役なのです。やったときには，とてもかっこよくて「よかった」と思いました。―(略)―5年生の音楽会では木琴，6年生ではティンパニーという大きな太鼓で演奏しました。スターウォーズでの最後のティンパニーのソを打ち終わった時には生まれて初めての気持ちよさを知りました。
>
> 隆の卒業文集より

雪菜や勇作たちは，音楽会後も授業の中で江戸囃子を発表し続けた。お昼に行っている自主的なミニコンサートにも積極的に参加した，次第に笛の響きも美しくなってきた。

(4) ミニコンサートで表現の場を広げる〈97/99　4～6年〉

5年生では，クラス替えのために，息がぴったりだったお囃子グループがバラバラになった。そこで，彼らは自主的に同好会をつくり，昼休みや放課後，気がむけば集まって練習をした。いつも若山社中の

手附をみながら見本のテープをよく聴き，手を動かしていた。時々部屋をのぞくと，仲間が少しずつ増えている。受験勉強で疲れているはずの政志や翔太，こだわりの相田たちも参加している。テープを聴きながら，手附けを見て，唱歌していた。6年になると，いつの間にか太鼓の唱歌，桶胴の唱歌，篠笛の唱歌をみんな覚え，他の唱歌を歌いながら，自分のパートを演奏していた。かなり高度な活動であり，私はすっかり驚いてしまったミニコンサートでも，何度か発表するうちに演奏は次第にまとまりのあるものになり，低学年にファンもできてきた。6年生の全校音楽会では，同好会の発表として，江戸囃子の曲の一つ『屋台』を全曲発表した。

僕は2年生のときに，初めて篠笛に出会った　……高い音が出てくるようになるとだんだんおもしろくなった　……四年生の劇はかなり好評だった。ちょこちょこ練習していた江戸囃子の『屋台』の頭だけ，最後に演奏した 。歌もいいが劇そのものがとても印象に残った。一つの目標をたてた。卒業までに『屋台』全曲を演奏することだ。……6年11月。 打ち出しの太鼓の音がシンとした講堂に響き，僕の高い笛の音がいっぱい響き渡った。その直後，みんなが心を一つにした楽器の音が，より 一層講堂中を駆け巡った。……

勇作　卒業文集より

音楽会後，江戸東京博物館前でも路上コンサートを行った。

…（略）低い「ぴー」から，高い音の「ピー」に変わり，篠笛の楽譜もすらすら読めるようになりました。四年生の時は少し短くしたものでしたが，六年生の今では，屋台の全部が吹けるようになりました。最初は，四，五人だった仲間が今では十人にもなりました。仲間が増えたことによってとぎれていた音も一本につながり，長い曲にも吹けるようになりました。　……　六年間の思い出になればと思い，最後まで一生懸命吹きました。これからもともだちと一緒に続けていきたいです。今度は品川のお祭りのお囃子に父と一緒に参加したいと思います。

瑠偉　卒業文集より

勇作や瑠偉のように，自分の求める音の世界にどっぷり入っていく子がいたことは，他の子にどんな影響を及ぼしただろうか。スピードというグループが大好きな耕治は，歌も踊りも堂々とみんなの前で一人で発表するようになった。こだわりの相田は，もう一つ関心のあった木琴に夢中になった。トルコ行進曲を男子4人，女子2人で演奏し，大好評だった。政志や翔太は，休み時間に太鼓を打ち，仲間と会話し，その場のうち解けた雰囲気に身をおくことで，穏やかな表情を取り戻しているように感じた。各クラスでの子どもが音楽に向かう様子を見ると，自分なりの音との関わり方や楽しみ方ができてきたように思えた。多様な表現媒体を介し，仲間と協働しつつ自分なりの音の楽しみ方に参加していく姿勢を感じた。

江戸囃子は，教室の音楽の中心とはならないが，ずっと江戸囃子を楽しむグループが全体の周縁にいて，その音色が絶えず聞こえ，また楽しむ姿勢が周りに感じられるということが大きな意味を持った。一人ひとりが思い思いに新たな文化実践（おもしろそうなこと）に参加していくサイクルが授業の中に定着した。

(5)　文化をつなぐ〈99年　6年～卒業後〉

6年音楽会後，「お囃子教えて」「篠笛吹きたい」という希望が下の学年から幾つもあった。慌ただしい中で，在学中は，なかなか機会を持てなかったが，中学入学後，何回か，部活の日程を調整して，教えに来てくれた。進学先も異なるので，継続はむずかしかったが，それでも，後輩の何人かは，少しずつ吹けるようになった。締太鼓の希望者は，比較的早く，手を覚える。しかし，篠笛はコツをつかむまでに時間がかかる。彼等の指導を見ていると，感心するほど辛抱強く，待つ。自分も身体で覚え込むまでに時間がかかったからだろうか。優しく励まし，助言する姿があった。

2年後，6年は卒業公演に子ども歌舞伎『毛抜き』を上演した。プロの方々に教えていただいたのだが，囃子方を希望した中には，彼等に教えてもらった子が含まれていた。また，帰国したばかりで『屋台』を聴いて感激していた猛は，子ども歌舞伎公演では一人で屋台の打ち込みを披露した。(詳細は上田のり子　子ども歌舞伎「毛抜」2002)

秋の音楽会では，「われこそはネコ01」と銘打ち，彼等が行ったミュージカルを改訂して，新4年が発表することになった。ところが，この学年は低学年の時に，音楽という教科がなく，和楽器の経験も積み重ねが薄い。希望している子たちも，なかなか音がでない。「あのお姉さん達に来て欲しいな」という希望が子ども側からあり，打診したところ，2週間に渡り，瑠偉たち数名が交代で放課後指導してくれた。4年生の子は，私が指導するよりも，リラックスしながら前向きに取り組み，ようやく笛が鳴り始めたときは狂喜していた。音楽会当日，不安だったのか，4年の子ども達は頼み込んで，朝早く，瑠偉達に学校に来てもらった。「大丈夫だよ」という一言は4年にとっては神様のように心強かったらしい。いい表情で演奏することができた。

テープに合わせて唱歌したり，実際に演奏して聴かせてくれたり，小テストとかして励ましくれたのが，嬉しかった。お姉さんはとても素敵だった。　（4年　真紀子）

中学生の存在は，真似ぶのにちょうどいい存在だったのだろう。

最近は箏も常に使えるように置いてある。太鼓や笛や箏の音色が，音楽室から休み時間も絶えず聞こえて来る。

Ⅵ　ま　と　め

1　学習材としての日本音楽の有効性

(1)　唱歌の魅力と身体性

口頭性と書記性の中間にあたる役割を持つ唱歌（しょうが）は，それだけで，豊かな音楽である。子どもは，自然に自分の身体感覚とつないで唱歌を楽しむ。それぞれのパートが集まれば楽しいアンサンブルとなる。また，このアンサンブルは，表情，仕草，かけ声一つで，テンポも変わっていく。

今そこにいる子の，その時の気分や状態で生み出される，ジャズのような楽しみがある。低学年でもとても創造的な表現がうまれる。あそび感覚でも，もっと活用できる。実際に演奏しなくても，唱歌することによってなりたい自分（次への可能性）を求め，新たな活動に，新しい仲間と文化的実践を営むことができる。

94,95年度　あそんだ曲

曲名	音構成	曲名	音構成
いちじくにんじん	r d l	どーどーめぐり	m r d
いっちょこにぐるま	s m r d	どーやくびんびん	m r d
おーふぐこふぐ	となえうた	びっきどの	r d l
くまさんくまさん	m r d	いちわのからすが	m r d
たこたこあがれ	r d	もぐらどんの	r d
ちゃちゃちゃつぼ	となえうた	ぶーぶーぶー	m r d
十五夜さんのもちつき	r d l	さらわたし	m r d
げっくりがっくり	m r d l	おらうちの	r d l
からすかずのこ	となえうた	お茶をのみに	m r d
なかなかホイ	m r d	なべかま	r d
たまりやたまりや	d l	つーながれ	r d l
ひとなげふたなげ	m r d	赤鬼さんびき	m r d
いもむしごろごろ	r d	一銭かいましょか	m r d l
おせよおせよ	r d	さるのこしかけ	m r d
さよなら三角	となえうた	ねんねんねやまの	m r d

(2)　音の高低やリズムを意識する

わらべうたは日本語の抑揚に即している。94,95年度に扱った曲では次のように分類される。

遊んだわらべうたは，ほとんどが2～3度，広くても5度以内の音程で構成されている。

リズムも ♩ ♫ 𝄾 の組み合わせで，一部 ♪ ♩ ♪，♩. ♪ が入った構造である。

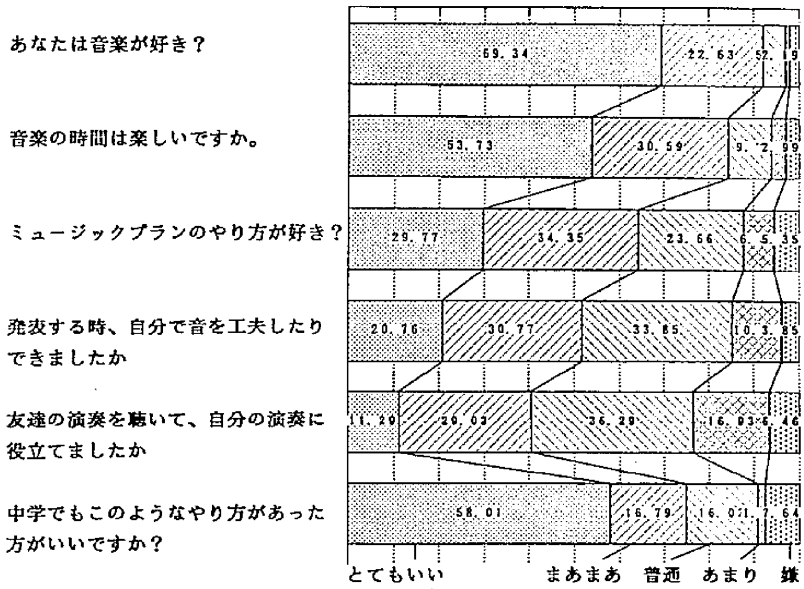
日本語の抑揚と重なるので，自然に歌いやすいし，耳を澄ませて 意識して

聞き分けと歌うことが比較的できやすい。事例に挙げた政夫も，身体が安定したリズムに乗ったことと，狭い音域のうた であることが，他者と声が揃う要因だと考えられる。

2　授業に対する子どもの評価

今回実践報告した，６年間継続して受け持った子どもたちは，偶然なことに，１年と６年の時に教科のアンケートをとっている。１年の時は全校の子どもに向け，何の教科が好きかを調べたものであった。アンケートに対し，１年生119名中113名が「音楽は好き」と答え，学年教科内でも，全学年を通しても一番好きな子が多いという結果であった。音楽室には毎回喜んでくる子が多いが，「いつ音楽の勉強するの？」と子どもが尋ねたことからすると，音楽室での活動は彼等にとっては，すべて「あそび」意識だったのかもしれない。椅子に座って五線譜の読み書きができることが音楽の基礎だというような考えだったら，全く異なる結果であったろう。音楽は座学ではなく，行動する時間として彼等の中に位置付いていた。

６年の時のアンケート結果は，次の通りである。



資料⑥　音楽の授業に対するアンケート　2000年２月実施

ミュージックプランにもとづく学習は，「自分でやりたいことを選び，個人やグループで演奏し，みんなに発表して交流・評価しあう」活動。選曲や方法，形態，用いる楽器など自由。さらに学習の進め方も２か月に一回は発表しようが原則。あとは子ども自らが選択し，計画して行うところに特色がある。

内容は，歌に踊り，ピアノや劇など多様である。

このミュージックプランによる学習の中で，勇作や瑠偉は，江戸囃子にこだわり続けた。ある子にとっては，ピアノが一番。ある子にとっては，流行の曲。勇作達には江戸囃子がとても心惹かれる音楽であった。異なるジャンルの音楽が，どれも尊重され，意味づけられることは，彼等の音楽観を広くしたように思う。しかし，自分で選び，自分のやり方で学習内容や方法を追究するということは，責任を持って私らしさを公に表現するということである。自由と共に責任を伴うので，教師がお膳立てした音楽活動に乗るほうが楽でいいという答えもあった。

６年生で行った「私の音楽12年史」では，自分の12年間を振り返り，その時々の自分にとってのニュースと好きだった音楽などをまとめた。彼等のなかの約３割が，２年での「江戸囃子」との出会いを挙げていた。強い印象が残ったのだと思う。

また，Ⅳ・Ⅴ章でも幾つか取り上げた卒業文集の中では，40名の子が音楽について触れている。音楽活動を通して感情が揺れ動き，表現した喜びが語られている。自分がこだわった音楽，或いはみんなで力を合わせて大曲に向かい，豊かなハーモニーをうみだしたことは音楽経験の一つとして一人ひとりの身体に残っている。それが新たなものや人との出会い，次への学びの一歩となる。

3　学びを育む表現の場の工夫

子どもが自ら意欲的に参加出来る表現の場を積極的に設定し，一定の成果をあげてきた。

日常の授業で	授業を超えた学校文化へ	授業の延長から学校文化へ
ミュージックプランにもとづ 発表の場（個人・グループ） リクエストによる歌唱	休み時間に希望者が集まって開くミニコンサート （個人・グループ・学級）	年に一度の音楽会 全校参加 （学年単位）

◎発表者は，聴き手にもなる。このような場を多く体験することは，よき聴衆を育て，またそこで鑑賞し，感じたことを生かした発表者としても育つ。その文脈は個々に異なり，それぞれの個性や技能の熟達度，興味などと絡まって変容していく。演奏者或いは聴衆として，繰り返し体験し，触発しあい，表現を共有する中で，音楽表現はより豊かになり，集団としても高まる。

◎江戸囃子や箏を楽しむ子の演奏や姿が，学校のいろいろな場面にあることは，関心の薄い子や，実際には演奏したことのない子達に影響を与えた。自分は演奏しなくても，演奏を楽しむ子達の音色や表現，姿をその場で共有し，感じる（周辺的参加）ことが学びであり，次への音楽的欲求につながっていく。

◎クラスでの発表の履歴を振り返ると，４年生では，どのクラスも100曲前後が１年間で発表されている。これだけ多様な音楽との出会い，音楽を楽しむそれぞれの仲間の姿との出会いは，学校教育ならではである。その中に，わらべうたや江戸囃子のような日本音楽がきちんと位置付いていること。どのような音楽も阻害されず，認めあえていることが重要である。

◎箏の専門家にご指導を仰いだのを始め，これまで他の学習分野とも関わり，狂言や歌舞伎，お囃子や里神楽，アイヌや韓国の踊りを鑑賞する機会を得た。優れた伝統文化に触れることは子どもの技能，そして音楽そのものが飛躍するチャンスでもある。さらにミニコンサートを経験してきた中・高校生から自分たちの合唱や演奏を発表したいという声が挙がり，身近な年上のちょっとかっこいい演奏を聴く機会も増えている。これらの経験は子ども一人ひとりに新たな興味（学びへの新たな参加）を生み出している。格式張らずに，「今　わたしたちのそばに」日本音楽が脈々と息づいていることを実感できるような場を設定することが大切である。

けれども，場が学びを育てるのではない。学習環境を整えた中で，どのような出会いと対話を育もうと教師が考えるかが重要である。

4　教師の役割

(1)　つなぎ手としての教師

教師の役割の第１はつなぐことである。作品や人(子どもと子ども，集団，プロ，教師)，知識や演奏技能，社会と個々の子どもをつないでいくこと。特に日本音楽は，教師の側に技能や知識が乏しい。自分にない部分を，より専門性を持つ地域の方や保護者，他の教師，団体とつないで，子どもの表現欲求に答えたい。一人の教師の力量には限界がある。だからこそ，教師自身が多くの人や社会とつながり，ネットワークを結ぶことが大切である。

(2)　表現者としての教師

教師自身が社会の一員としての責任と自覚をもった表現者になること。そのために，まずよき聴き手になることを目指したい。外に表出されない内的表現を受け止めるためにも，子どものつぶやきに耳を傾け，表情や行動をしっかりみつめることが必要である。その上で，教師も表現者として子どもの前にたつのである。夢中になっている子どもの横に身を置き，一緒に表現行動に参加すれば，また違う世界が見えてくる。教師が真摯に学び，いろいろな人に助けられながら表現することが大事だと考える。

Ⅶ　お　わ　り　に

クリストファー・スモールは，自ら音楽を表演するだけでなく，聴く，或いはその活動を手助けする，語る，踊るといった音と関わる全ての活動を「ミュージッキング」という動詞で表している。楽器の演奏や鳴り響く音だけを音楽とするのでなく，心を癒したり思いを訴えたり互いにわかちあうという，社

会とつながる行動として捉えることに，私は今後の音楽教育を考えるヒントがあると考える。私たちが学校音楽の呪縛から逃れ，新たな意識で授業を見直すこと。日本音楽だけでなく，他文化他民族の音楽を受け止められる，豊かな表現者を育むために，音楽の授業の意味をもう一度問い直していきたい。

最後に音楽の授業を試行錯誤しながら一緒に考えてくださる同僚の上田のり子先生，公開研究会で的確な助言を下さる尾見敦子先生・永原惠三先生，音楽に対する考え方を広げてくださった徳丸吉彦先生，教育を考えるきっかけとなった西口敏治先生始めフレネ教育研究会の仲間たちに感謝する。そして，何よりも元和光小学校教諭・故野倉盛夫先生に。先生がいなければ，わらべうたにも，自分の中に流れる日本音楽への愛着にも気づかなかったし，教師も続けられなかった。心からの感謝と敬愛を。

参考　引用文献

芸術文化政策Ⅰ「社会における人間と芸術」徳丸吉彦　利光功　2002　放送大学教育振興会
「芸術・文化・社会」―芸術概念の拡大をめざして―徳丸吉彦　青山昌文　2003　放送大学教育振興会
「応用音楽学」山口修　2000　放送大学教育振興会
「音楽科における日本音楽」澤田篤子　2000　日本音楽教育実践学会紀要
「民族音楽理論」徳丸吉彦　1996　放送大学教育振興会
「民族音楽学」徳丸吉彦　1991　放送大学教育振興会
「音楽秘講座」山下洋輔×茂木大介　仙波清彦　徳丸吉彦　2001　新潮社
「和歌山流江戸囃子手附」若山庸雄編　1996　邦声堂
「ハンガリー子どもの遊びと音楽」フォライ・カタリン　1970　明治図書
「子ども歌舞伎『毛抜』」上田のり子　全国国立大学附属学校連盟音楽科研究会研究年報　2002年　p6～7
『2003年，伝統音楽は生きている』小島美子　伝統音楽研修会　2003　文部科学省
シリーズ教育の挑戦「学ぶということの意味」佐伯胖　1995　岩波書店
シリーズ教育の挑戦「子どもを育む授業づくり」知の創造へ　秋田喜代美　2000　岩波書店
シリーズ教育の挑戦「教育改革をデザインする」佐藤学　岩波書店
シリーズ学びと文化①「学びへの誘い」1995　佐伯胖　藤田英典　佐藤学編　東京大学出版会
シリーズ学びと文化⑤「表現者として育つ」1995　佐伯胖　藤田英典　佐藤学編　東京大学出版会
シリーズ学びと文化⑥「学び合う共同体」1996　佐伯胖　藤田英典　佐藤学編　東京大学出版会
「学びを問い続けて」授業改革の原点　佐伯胖　2003　小学館
「コンピューターと教育」佐伯胖　フレネ教育研究会報№49　ｐ２～23　1998
「幼児教育へのいざない」円熟した保育者になるために　佐伯胖　2001　東京大学出版会
「教師たちの挑戦」佐藤学　2003　小学館
「学びその死と再生」佐藤学　1995　太郎次郎社
「学びの快楽」ダイアローグへ　佐藤学　1999　世織書房
『自分たちのアイディアを生かしたミュージカル』猶原和子「都市型の総合的な学習」p144～p151
『音楽で表現するということ』猶原和子　フレネのⅠ「学びの共同体」1996　p34～68
佐伯胖　中西新太郎　若狭蔵之編　青木書店
『文化が育つ　共同体が育つ』猶原和子　フレネ教育「表現する教室」2000　p171～183
坂本忠方　若狭蔵之助　西口敏治編　青木書店
『つながりを深めるミュージッキング』猶原和子　第65回教育実際指導研究会発表要項　p90～93　2003
『からだ・ことば・音楽』猶原和子　フレネ教育研究会会報№68　p47～p56　2003